ペリー来航、日本開国への途

令和７年５月３日
横浜開港記念館にて
横浜歴史研究会　植木静山

・1776、7、4に独立したアメリカは、独立から77年目の嘉永６年６月３日（1853、7、8）に、日本を開国させようと使節として、ペリー提督が軍艦四隻を率いて日本の江戸湾に来航した。

アメリカは、短期日で急速に発展していたのだ。フロンティア・スピリッツに燃えて西に国土広げて、メキシコ戦争に勝利したアメリカは、テキサス・カリフォルニア・ニューメキシコという広大な領土を獲得し、太平洋岸にまで達しており、パナマ運河の建設にも着手していた。

そんな時に、第１３代フィルモア大統領が、ペリー提督に日本遠征を命じたのである。

・ペリーの航海ルート、1852, 11, 24に米東海岸ノーフォーク港ミシシッピー隻で出発して、大西洋―セントヘレナ、ーケープタウンーインド洋―シンガポールー香港―上海(艦隊を編成)―琉球、そして浦賀へと七ヶ月半で達していた。

その間、アメリカ東インド艦隊は、琉球には一ヶ月近く滞在していた。(首里城・尚泰国王を訪問、小笠原諸島へも行く)。(当時、油は鯨油であり抹香鯨・スパームオイル、日本近海には捕鯨船が頻繁に出没していた。上陸する異人もいたし、船が難破し、助けた異人は長崎に集められ、長崎奉行所が保護したが、外国では虐待されていると見られた。)

・嘉永６年６月３日（1853、7, 8）にペリー提督（58）は、申の上刻（午後４時）江戸湾内の浦賀に來航したのだ。

サスケハナ（2450ｔ77m）ミシシッピ（1660ｔ50m）サラトガ、プリマス。

・対応者、浦賀奉行所の月番与力中島三郎助（33)、(バイスガバナーとして)オランダ通詞堀辰之助（31)。最初は、艦隊を追い払うとしたが、

・「この艦船には、アメリカで最高位の人が乗っているので、あなた方は帰りなさい」

・通訳、アントン・ポートマン、サミュエル・ウィリアムズ（日本人の世話人）

・浦賀奉行、戸田伊豆守氏栄（54)、井戸石見守弘道（59)

・当時の幕府の老中　阿部伊勢守正弘（35)、牧野備前守忠雅（54)、松平和泉守乗全、松平伊賀守忠優、久世大和守弘周

・将軍　第12将軍徳川家慶（61)、第121代孝明天皇（23)、当時の実力者　攘夷派の巨頭　水戸の徳川斉昭（53)

・嘉永６年６月４日　与力の香山栄左衛門（31）ガバナーとして対応する。

・(米側は、大統領親書を受け取るか否かの回答を三日間だけ待つ）6/7回答。

６月５日　幕臣総登城。アメリカ国書受領か拒否か、打ち払い派と受入れ派、

・嘉永６年６月９日　　久里浜にて、アメリカ大統領親書　受領。

戸田伊豆守と井戸岩見守が日本側の総奉行として受領する。

・嘉永６年６月12日　アメリカ艦隊は、来年４月か五月頃に、日本の返事を大艦隊を率いて聞きに来航する旨告げると、横須賀沖から日本滞在10日間で去って行った。

・さて、大統領親書は英語、オランダ語、中国語で書かれていたが、英語は訳せず、これを林大学頭復斎が中国語、古賀茶渓がオランダ語を訳し、これを付け合わせて、

日本語の翻訳文を作った。

・大統領親書の内容は、　1，日本の開国と友好、2，通商、3，石炭と食料の供給、
4，捕鯨船など船舶の保護、

・嘉永６年６月22日　この日、第十二代将軍　徳川家慶（61）が急死した。
この死去をオランダ商館に伝え本国と、ペリー提督へも伝え、来航の時を大幅に遅らせる連絡してもらった。

・所が嘉永６年７月１８日　ロシアのプチャーチン提督が軍艦四隻で長崎に来航し、日本の窓口は長崎に来たと告げて誠に礼儀正しく。ロシア皇帝ニコライ一世の国書を持参。1，日本の開国、2，通商、3，北方領土問題を話し合いたし。
長崎奉行は、大澤豊後守乗哲、水野筑後守忠徳

・幕府は対米対策、それどころでなく。ロシアが礼儀正しいので放っておく。
・先ず、大船の建造を解禁し、江川太郎左衛門に江戸の全面に台場建設させる。
・土佐の漂流民であった中浜万次郎を幕臣に登用。オランダに武器を発注する。
・次に、アメリカ国書を公開して、諸大名に広く意見を求めた。
・大名の大半の意見が、「アメリカの申し入れを拒否して、必要ならこれを撃つべし」とする攘夷論であった。

開国に賛成したのは、佐倉の堀田正睦、中津の奥平昌服、彦根の井伊直弼ら四・五人あった。井伊の意見は強烈であり、海軍の創設にも触れていた。

「今は交易の儀は国禁なれど、時代に今昔の相違あり、有無相通ずるは天地の道なり、祖宗の神に告げて、この方より商船をオランダ会所ジカルタへ遣わし交易すべし‥‥
また、日本人自在に大洋を乗り回して、他日の海軍の設立に備え心掛けべし‥‥」

・嘉永６年10月23日には、　第十三代将軍　徳川家定（31）将軍宣下の式。
・ここで、ロシア応接掛を長崎に派遣することとする。
メンバーは、川路聖謨（52）、筒井正憲（76）ほか２名。
オランダ通詞　森山栄之助（35）
・だが幕府の返事は、アメリカ国書を受け取ったが、交渉は始まってない。

・嘉永７年１月８日　ロシア艦隊とプチャーチン提督は、何の成果を得られずに長崎を退去。

・嘉永７年１月16日　ペリー提督が強力艦隊を率いて再来航。浦賀を無視し小柴沖に停泊。
サスケハナ、ミシシッピ、ポーハタン蒸気船、レキシントン、バンダリア、マセドニアン、サザンプトン、遅れてサラトガ、サプライが来航。
プリマス（琉球に石炭庫・常駐）
・アメリカ応接掛　林大学頭復斎（53）、井戸対馬守覚弘（29）、伊澤美作守、鵜殿民部少輔の５名。オランダ通詞森山栄之助
・先ず問題は交渉の場所。米側は江戸を主張し譲らず。日本は浦賀。
ペリーは、全艦隊で羽田弁天沖に進出し、大砲で威嚇す。品川の民は避難す。

・　嘉永７年１月25日（2/22）ワシントン生誕祭。江戸湾内の各所で派手に祝砲を撃つ。

・　々　　１月28日　・香山栄左衛門が横浜村の沖合にて交渉場所を提案。（横浜誕生）

漂流日本人サムパッチ（仙八）が艦隊に乗船しいると知らされる。

・ 嘉永７年２月10日。横浜応接所にて第１回日米交渉。Treaty house

・アメリカ側　ペリー提督、アダムズ参謀長、ポートマン、
ウィリアムズ、ペリー秘書官、

・ 米側は、清朝と結んだ「望厦条約」と同じような通商条約を結びたいとして、望厦条約の写しを日本側に渡した。日本側は皆、四書五経の素読で教育されていたので、これを簡単に読め理解できたが、それは不平等条約であり、こんな条約を結んだら‥‥。

日本側は、林大学頭が代表して、「日本は米国や清国と違って小さな島国であり、産物も人が生きるために必要な物ばかりで、他国に渡す余裕などありません。それに日本人は質素を旨とする生き方が理想なのです。ですから長崎で異国から取り寄せる物も、必要最小限度のものなのです。ペリー提督閣下にお尋ね致しますが、閣下が日本で得たい物が、何かあるでしょうか」ペリーは、「交易を行なえば、日本で物が不足した時、他国から輸入すことが出来る」

ペリーは海軍軍人であり、通商や交易の知識はあまりなく説得力に欠けていた。

・嘉永７年２月15日　小型機関車、通信機、ライフル銃、ウィスキーなどを贈呈する。
これに返礼として日本側は、相撲取り達が米俵を担いできて米へ贈る。

・ 次の交渉でペリー提督が、突然海兵ロバート・ウィリアムズが死亡したと告げ、滞在が長くなりこれからも死者が出る。資金は十分あるので墓地となる島を買いたいと要望した。

日本側は困ったが、横浜村の増徳院に埋葬する。ペリーは感激して「横浜のテンプルか」

・ 次にペリーは、捕鯨船・ラゴダ、プリマス、ローレンス、エセックスなど遭難者を長崎の牢獄入れた、日本は、遭難者を罪人扱いしたと大声で決めつけた。

・ また、ペリーが質問した。「日本側は遭難難破した船だけでなく、航海中に物資が不足して購入を希望するアメリカ船にも、物資を供給するつもりがあるのか」

林大学頭が、「それは無理でござる。日本は遭難した船には不足している物を提供致しますが、アメリカ船に物資を売るつもりは毛頭ありません」と答えた。

ペリーは、「アメリカ船は、物資に対して正当な代価を支払うつもりだし、世界の他の国々でも、そのようにしている」と説明した。

林は、「日本は遭難した船に物資を贈るのであって、物資の贈答には、他国のことは存じませんが、日本では代金も返済も必要ありません」

ペリーは方向転換をはかって、「それではアメリカ人が贈られた物資に対して、お礼の贈物を渡すとするなら、どうだろうか、受け取ってくださるか」

林が答えた。「それなら、受け取ってよろしゅうございます」

ペリーは更に、「日本人はお礼の贈物が、アメリカで作られた品物を好むだろうか。それとも金か銀かを好むだろうか」と尋ねた。林は、用心深く答えた。「もし、品物を受け取れば、物と物との交換になり、交易を行なうようなことだ」　ペリーは、間髪入れずに云った。「それでは、金か銀かでお礼を渡そう」こうして、物資の提供には金か銀で決済すると合意した。

林は何か釈然としなかったが、林が一番気を付けたのは、最終的な合意文書に「交易」とか「通商」とかの文字が絶対に入れないことだった。

・次に開港地について、日本側は「長崎」推薦したが、ペリーは強く首を横に振り拒否した。

「長崎は外洋に面しておらず、不便な港だ。それに長崎の住人は、オランダ人や清国人の

服従的態度やおべんちゃらに日頃ら慣れているだろうから、アメリカ人にも、服従や従属を求めるだろう。この態度や習慣は、簡単に改められるものではない。だから駄目なのだ」

林が抗議しようとすると、日本地図を広げて、日本の中央に位置する下田を指した。

日本の南・那覇、中央・下田、北・箱館の三港を、開港地して領事を置くことを求めた。

（那覇）が、日本の統治下ないと聞くと、ペリーは、帰路に琉球に寄り条約を結ぶとした。

・ 嘉永7年2月29日。ペリー提督は、応接掛、交渉の裏方、実務者など約70名をポーハタンに招待した。ウッスキーや肉類が出されたし、アメリカ海軍得意のショーも披露した。タップダンスやバンジョ演奏、金髪美女が登場し水兵との別れの寸劇などあり、侍達はポカンと口を開けて見とれ、ア艦隊には女も乗っていると信じて疑わなかった。

・(1854, 3, 31)、12条からなる「日米和親条約」（神奈川条約）締結した嘉永7年3月3日。

条約の性格は、Peace平和、Amity友好、であり、アメリカが求めたCommerce通商は結ばれなかった。しかし日本が求めたのは、平和すなわち「和」、友好すなわち「親」であり、結果、日米和親条約となった。開国に反対の勢力も、時代の趨勢として開国は止むなしとした。

こうして「日米和親条約」が締結された。次にペリーは艦隊を率いて、嘉永7年3月21日（1854年4月18日）に下田に移動した。

下田は伊豆半島の先端部に位置し、江戸時代初期に家康が江戸城を築城すべく城壁の石を積み出した港であり、今は円形の入江は、江戸と大坂を行き来する廻船の風待ちをする港であり、旅籠と遊郭のある、戸数約千戸のなまこ壁造り家の多い下水溝もある清潔な街であった。

船頭達は、“伊豆の下田に上てみれば、一泊二泊と泊まりを重ね縞の財布が空となる”と歌っていた。

また街のあちこちには共同浴場があり、一日の仕事が終わると、人々はそこで体を洗い清めるきれい好きな民族と思っていたが、ペリー始めアメリカ人達は、共同浴場が男女混浴であることを知るとショックを受け、ペリーは日本人は淫猥な民族に違いないと思った。

また、若い水兵達の興味を引いた下田の名高い遊女達は、最初こそ「たとえ千両万両積まれても、異人とは遊びたくない‥‥」とお高くとまっていたが、水兵の人柄や気前良さ、異国の珍しい品物に心奪われ、お酒の相手だけならと、応じる者もいた。軍規にきびしいペリー提督は、軍法会議にかける……。

下田でもポーハタンの若いパリッシュ水兵がマストから落ちて絶命した。若い水兵はコネチカット州ヘブロンの両親の元へ帰ることなく、下田郊外柿坂の玉泉寺に埋葬された。

もう一つの事件は、嘉永7年3月28日に起きた「下田密航事件」である。吉田松陰と弟子の金子重之助は、その夜の夜半過ぎポーハタンに近づき、甲板上でアメリカに連れて行く事を懇願した。対応したのは日本語の話せるウィリアムズであった。「アナタ侍、裏切リヲ好ノミマスカ」と問い掛けた。「米ハ日本ト条約ヲ結ンダバカリデス。デスカラ裏切リデキマセン。これから機会は幾ラデモアリマス。ソノ時を、急いで帰れば捕マルコトアリマセン」

吉田松陰は自首した。このほか佐久間象山が使嗾の罪で捕縛された。当時、密航は死罪であったが、老中首座の阿部正弘は、国元での謹慎とした。井伊直弼は甘すぎると批判した。

ペリー提督は下田に25日間滞在した後、1854年5月13日（嘉永7年5月13日）早朝、箱館へ向かい17日に着いた。箱館は広い湾内それに続く陸地はなだらかな傾斜をなしており、港の東側には約三千戸と言われた街がゆったりと広がっていた。ペリーは箱館を理想的な港だとして満足していたし、地中海のイギリスの要衝ジブラルタルに似ていると思った。しかし、街の斜面の道には、住民達が避難していく長い行列が続いていた。

艦隊が錨を下ろすと、丸に武田菱の旗を船尾に付けた松前藩の御用船がやって来た。役人達は日米間で、条約が結ばれたことも下田と箱館が開港されることも何も知らなかった。

そして、ペリーが下田から箱館まで4日間でやって来たと聞くと、眼を丸くして驚いた。

当時、「江戸～箱館間は、冬三十七日間、夏三十日間とされていたからだ」

箱館の商人達も店を閉じて、アメリカ人に物を売る気など更々なかったが、慣れてくると気前よく何でも買ってくれるアメリカ人に佛具である鉦や木魚、袈裟まで売りつけたが、キセルが1，643本も売れた。日米貨幣の交換率が下田は1銀貨・千二百十文、箱館は四千八百文であり、交換率がまだ決っていなかったが、箱館の方が正しかった。

箱館でも19歳のレミック水兵と50歳のジェームズ水兵が病死し、反旗を掲げて海軍葬が行なわれた。同じバンダリアの乗組員達は、異国の地に眠るようになった同僚の死を悼んで碑文をつくり日本の石工に英文で彫って建てる依頼して、箱館を去って行った。次の碑文である。

船乗りよ、安らかなれ　汝らの旅はおわりぬ　　汝が友は　ここに友情の印を残しておく
ある人は立ち止まり　一滴の涙を流すかも知れない
幾年月　烈風に雄々しく立ち向かい　祖国に命を捧げし者に　　（筆者約）

ペリー提督は、百三十二日に及ぶ2回目の日本訪問を終えて下田に帰り、日本に別れを告げて、琉球と「琉米条約」を結び那覇を開港させべく向かった。

が、石炭庫の管理をしていたウイリアム・ボード水兵が泡盛を盗み飲みいて、婦女子に乱暴して、那覇の住民に殴り殺されるという事件を起こしていた。

この為「琉米条約」では、日本との条約にないアメリカ人の逮捕権を認めざるを得なかった。こうして、ペリー提督は総ての任務を終え香港に帰ったが、そこには一通の手紙あった。

手紙には、「貴官は香港到着後、艦隊の指揮権を先任艦長に申し送り、合衆国に帰還されたしー」　六十歳の定年を過ぎたペリーは、これで総てが終わったと思った。

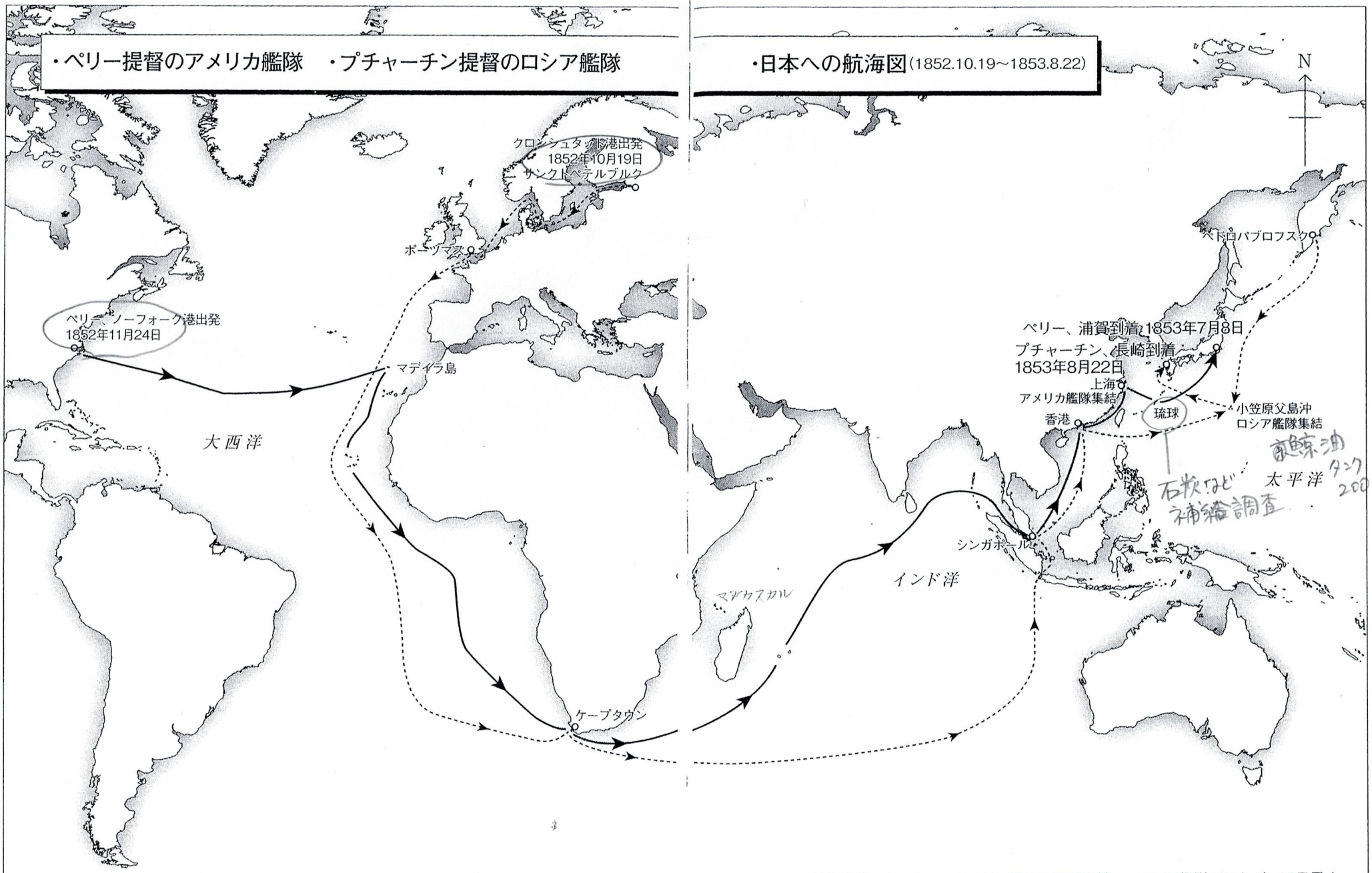
幕府は、ペリーが去り一安心し、ロシアのプチャーチンがいつ来るのか待ち受けていたが、とんでもない客がやって来た。アヘン戦争で大清国を打ち破った。

世界最強と言われた英国艦隊の来航であった。1854年9月15日(嘉永7年閏7月15日)、サースタリング提督の艦隊の大砲50門ウィンチィエスター、外輪式蒸気船バラクーダとスフィンクス、スクリュー船エンカンターであった。

ロシアのプチャーチン提督は、1854年9月25日（嘉永7年11月15日)、下田へたった一隻の帆船でやって来た。

・ペリー提督のアメリカ艦隊　・プチャーチン提督のロシア艦隊

・日本への航海図(1852.10.19～1853.8.22)



注）帝政ロシアとアメリカは、日本の開国を競い、ロシア艦隊のほうが、36日早く出発したが、アメリカ艦隊のほうが、1ヵ月以上早く日本に到着した。

資 2/4

MILLARD FILLMORE, PRESIDENT OF THE UNITED STATES OF AMERICA, TO HIS IMPERIAL MAJESTY, THE EMPEROR OF JAPAN.

GREAT AND GOOD FRIEND: I send you this public letter by Commodore Matthew C. Perry, an officer of the highest rank in the navy of the United States, and commander of the squadron now visiting your imperial majesty's dominions.

I have directed Commodore Perry to assure your imperial majesty that I entertain the kindest feelings toward your majesty's person and government, and that I have no other object in sending him to Japan but to propose to your imperial majesty that the United States and Japan should live in friendship and have commercial intercourse with each other.

The Constitution and laws of the United States forbid all interference with the religious or political concerns of other nations. I have particularly charged Commodore Perry to abstain from every act which could possibly disturb the tranquility of your imperial majesty's dominions.

The United States of America reach from ocean to ocean, and our Territory of Oregon and State of California lie directly opposite to the dominions of your imperial majesty. Our steamships can go from California to Japan in eighteen days.

Our great State of California produces about sixty millions of dollars in gold every year, besides silver, quicksilver, precious stones, and many other valuable articles. Japan is also a rich and fertile country, and produces many very valuable articles. Your imperial majesty's subjects are skilled in many of the arts. I am desirous that our two countries should trade with each other, for the benefit both of Japan and the United States.

We know that the ancient laws of your imperial majesty's government do not allow of foreign trade, except with the Chinese and the Dutch; but as the state of the world changes and new governments are formed, it seems to be wise, from time to time, to make new laws. There was a time when the ancient laws of your imperial majesty's government were first made.

アメリカ大統領ミラード・フィルモアより
日本皇帝陛下に呈す

偉大にして、良き友よ。私はマシュー・シー・ペリー提督をしてこの公式文書を陛下に贈る。同提督は合衆国海軍の最高位にある士官であり、このたび陛下の国土を訪れる艦隊の司令官である。

私はペリー提督に、次のことを確言するよう命じている。すなわち、私は陛下と陛下の政府とに対して深甚なる親愛の情を抱いており、また私が提督を日本に派遣した目的は、合衆国と日本とが友好を結び、相互に商業上の交際をなすべきことを提案するためである。

合衆国の憲法および法律は、ほかの国民の宗教的あるいは政治的問題に干渉することをすべて禁じている。私は、特に陛下の国土の安寧を乱すような行動はいっさい慎むように、ペリー提督に訓令している。

アメリカ合衆国は大洋から大洋にまたがり、また我が国のオレゴンとカリフォルニア州は、陛下の国土とまさに向い合って横たわっている。我が国の蒸気船は、カリフォルニアから日本まで18日間で行くことができる。

この大カリフォルニア州は毎年黄金6,000万ドルを産出するだけでなく、銀、水銀、宝石その他多くの価値ある物資を産出している。日本もまた豊かな豊饒な国であり、多くの価値ある物資を産出しているし、陛下の臣民は多くの技術に熟達している。私は日本と合衆国の双方の利益のために、両国が相互に交易すべきことを切望している。

我々は、陛下の政府の古い法律が、中国とオランダ以外の外国との貿易を許さないことを知っている。

しかし、世界の情勢は変化し、数々の新しい政府が形成されている時、時勢に応じて新しい法律を定めることが賢明と思われる。陛下の政府の古来の法律といえども、初めて制定された時代があったのである。

その時代と同じ頃、新世界と呼ばれたアメリカがヨーロッパ人により発見され、植民されたが、長い間、人民は少なく、貧しかった。現在では人民は膨大な数となり、商業も著しく拡大した。もし陛下が古い法律を改めて、両国間の自由な交易を許すならば、両国にとって大きな利益となると考えている。

もし陛下が外国貿易を禁じている古い法律を廃しても、なんの支障もないということに同意しないのなら、その法律を 5年ないし10年間は保留して、実験を試みることを勧めたい。所期の利益が得られないことが明らかになれば、古い法律に戻せばよい。我々はしばしば外国との条約を 2,3年に制限し、相手の意向で更新することも、そうしないこともある。

私はペリー提督に、もう一つのことを陛下に告げるように命じている。

すなわち、我が国の多くの船舶が毎年カリフォルニアから中国に航行しており、また数多くの我が国民が日本近海で捕鯨に従事している。

時には悪天候により、我が船舶の一隻が貴国の沿岸で難破することもある。このような場合は、我々が船を送ってそれらを回収するまで、我が不幸な国民を親切に待遇し、その財産を保護すべきことを要望し、期待する。我々は、このことについて極めて真剣である。

またペリー提督は、以下のことを陛下に告げるよう命じられている。

すなわち我々は、日本帝国内に石炭と食料が豊富にあることを知っている。我が国の蒸気船は大洋を横断する時に多量の石炭を焚いているが、石炭をはるかアメリカより積んで行くのは不便である。我々は、我が蒸気船及びその他の船舶が日本に停泊し、石炭、食料、水の供給を受けることが許されるよう願っている。我が船舶は、これらの物に対して、金銭または陛下の臣民が好む物によって対価を支払うであろう。

また我々は陛下に、我が船舶がこの目的のために停船できる便利な港を一つ、帝国の南部に指定されることを熱望する。我々はこのことを熱望している。

私がペリー提督を強力な艦隊と共に派遣し、陛下の名高い江戸市を訪問させる唯一の目的は、1友好、2通商、3石炭と4食料の供給、及び5難破した国民の保護である。

我々はペリー提督に、陛下が 2、3 の贈物を受け取るように懇願せよと命じている。贈物はたいした価値のある物ではないが、合衆国で製造された物品の見本として役立つやも知れず、また我々の誠実かつ敬意に満ちた友情の印しとしたい。

万能の神が、陛下に偉大にして神聖なる加護を賜らんことを！

その証しとして、私は合衆国の大印章をここに捺印させ、私の名を署名する。

アメリカ、ワシントン市、我が政府の所在地にて　　1852年11月13日

陛下の良き友　　ミラード・フィルモア

大統領命により副書　　国務長官　　エドワード・エヴァレット

3/4

資4/4

ペリー来航時の江戸湾（1853～54年）

■は建物の位置、□内は防衛担当地区の藩名